

食物学会誌の体裁一新によせて

副学長（学術研究）・名誉教授 中山 玲子

この度、食物学会誌の体裁が約70年ぶりに一新されるにあたり、まず、本学食物栄養学科及び食物学会・食物学会誌の歴史を振り返ってみることにしました。

1920年（大正9年）本学の前身である京都女子高等専門学校が開学、1949年（昭和24年）に京都女子大学となり、食物学科（現食物栄養学科）、被服学科（現生活造形学科）、児童学科（現発達教育学部児童学科）を擁する家政学部が設置されました。翌1950年（昭和25年）に短期大学部が開学されています。

食物学会誌創刊号（1956年度）の巻頭言「食物学会誌発刊に際して」（会長 黒川喜太郎教授）によりますと、1954年（昭和29年）6月家政学部の三学科学生委員会は、各学会と相談して、「家政」の発刊を決議したとのこと。その後、1956年、学部の三学会は発展的に各々独立し、食物学会は「食物学会誌」を新たに創刊することになったようです。

創刊号の目次を見ると、総説、研究論文、自由論叢、紙上調理研究室、学会行事、学びの窓（栄養実習記、工場見学記、研究室だより）、編集後記と投稿規定が掲載されています。当時は、教員と学生より構成される食物学会会員の発表機関誌であり、先輩諸姉の活発な活動が窺えます。第11号より「学びの窓」に記載していた内容は別冊となり、その後、卒業研究の要旨も「卒業研究要旨集」として独立し、食物学会誌は大学紀要としての機能を果たすようになってきました。2012年（平成24年）度より京都女子大学学術情報リポジトリ（京女AIR）が導入され、WEB上でも学内外で広く閲覧できるようになり、本誌の閲覧数もかなりの数に上っています。

さて、今回創刊号の表紙を改めて見ますと、「食物学会誌」から「食物学会誌」へと旧字から常用漢字へ変わったのみで、2021年（令和3年）度まで、黄色B5版で表紙サイズ共に全く変わっていないことに気づかされます。この66年間で、食物学科は1993年（平成5年）に食物栄養学科と名称を変更し、さらに、2004年（平成16年）に、短期大学部生活科学科食物栄養専攻の学生募集を停止し、大学の定員を増加しています。大学院は、1967年（昭和42年）に家政学研究科食物学専攻（現在食物栄養学専攻）、2004年（平成16年）に生活環境学専攻博士後期課程を増設し、現在に至っています。このように、学科・大学院は変遷をたどり、食物学会の会員構成（教職員、学生）も変わってきていますが、伝統ある食物学会という名称は変更しませんでした。現在、食物学会誌は査読制を導入し、大学院生などの論文執筆力や研究力の向上にも一定の役割を担ってきています。

学科・研究科の研究領域も家政学から農学、医学、栄養学、食品学、生命科学と自然科学の研究領域の発展に伴い、研究内容も基礎研究から応用研究、また、動物から人を対象とした臨床栄養学などへと拡大、進展してきています。70年近い年月の中で、学会誌の体裁は全く変わっていなかったことに、驚きと同時に深い感慨を覚えます。

現在、食を取り巻く環境や健康に関する課題、研究は大きく変わってきています。食物学会誌が表紙体裁を一新して出発するにあたり、大学の研究紀要の意義と活用について改めて見直していただきたいと思います。

最後に、学科・研究科の研究の益々の発展と食物学会誌の充実を切に期待して、巻頭言と致します。